

埼玉育ちのグローバル人

駅伝選手だった私がモザンビーク経由でミツバチを育てるウメ農家になった話

第3回「誰一人取り残さないために」

元 JICA 海外協力隊員 2016 年 4 次隊

寺田 篤哉さん



埼玉県マスコット
「コバトン」



私とベルナルド

2 年目に入り、念願の養蜂家がいるザバラ郡に任地変更をした私は、カウンターパートである同僚のベルナルドと出会います。彼は、私より 2 歳年上の期間採用の養蜂普及員でした。期間採用の養蜂普及員はインヤンバネ州内に 10 人いて各郡で働いていました。彼もその一人です。3 年で結果を残さないとクビになってしまいますが、なかなか養蜂を根付かせるのは難しいようで、彼の任期は残り 1 年間となっていました。私の任期も残り 1 年間でしたが、プレッシャーは比になりません。そこで私が派遣されたことで、自然のミツバチの群を捕まえる技術、タンベアラ (伝統養蜂箱) から近代養蜂箱に移し替える技術を、ベルナルドと一緒に養蜂農家さんに教える活動が始まりました。

前回のタイトルである「素手で女王蜂を捕まえる」をすっかり忘れてしまいましたが、私はミツバチを触る時、手袋を付けずに素手で作業をします。モザンビークの養蜂家たちは刺されるのが怖いので必ず手袋を付けて、完全防備で作業をします。なぜ私が素手で作業をしていたかという



巣箱移し替え

と、彼らの尊敬を手っ取り早く得るためには、ミツバチを怖がらない姿勢を見せることが大切だと考えたからです。私たち JICA 海外協力隊の任期はわずか 2 年と短いです。その期間で信頼を得るには、圧倒的な技術力と度胸を見せつけるしかなかったのです。また、養蜂は花が咲いている期間しか作業が出来ません。モザンビークでは雨季と乾季がありますが、雨季にしか蜂蜜は採れませんでした。一緒に作業をする養蜂農家さんも、タンベアラ (伝統養蜂箱) を置きっぱなしにして、蜂蜜が入るまで待つ養蜂しか知らないの、女王蜂がいる事すら知りません。ベルナルドが理屈を説明し、私が作業を見せることによって、農家さんの信頼も得られるようになりました。任地変更してから帰国までに、ベルナルドと一緒に 150 群のミツバチの群を近代養蜂箱に移し替えました。それによって、ミツバチを殺さずに、蜂蜜だけを収穫できるようになりました。

また、蜂蜜を綺麗にするためにざるで濾すだけでは、細かい蜜ろうや花粉を取り除く事ができません。日本には専門の濾し布が売っ



蜂蜜ろ過

ていますが、モザンビークでは手に入らないのです。そこで、ザバラ郡でも購入できる中古のレースカーテンで濾すことを思い付き、綺麗な蜂蜜が採れるようになったのです。

次はラベルと容器を用意する事でした。同じ協力隊員である仲間にラベルをデザインしてもらいました。シールを作ることも検討しましたが、首都まで行かないと作るのも難しく値段も高いため、カラーコピーをしたラベルをテープで張りました。ベルナルドと一緒にイベントなどにも出店し、ザバラ郡の特産品としてどんどん知名度を上げていきました。

養蜂の技術の普及をしている時に、養蜂家の問題点が出てきました。これはアフリカでは当たり前のことですが、家の仕事を子供が手伝います。モザンビークの人口の 9 割は農家なので、養蜂家の子供は養蜂のお手伝いをするようになるのです。しかし、子ども達はまったく養蜂の知識がありません。蜂には刺されるし、蜂蜜はなかなか食べさせて貰えないし、養蜂のお手伝いは子供たちにとって良いものではありませんでした。

そこでベルナルドに相談したところ、彼の案で養蜂教室を開こうという話になりました。「おれ実は昔教師を目指していたんだ。でも農業のほうがモザンビークでは重要だからさ。でも彼らが持続的に養蜂をやるためには、子ども達にも正しい知識と技術を教えたいね」とベルナルドは言ってくれました。実は私も教員免許を持っていてその旨



養蜂教室①

を彼に伝えました。

①ミツバチの生態や養蜂の歴史などの座学、②ミツバチの捕獲や巣箱の移し替え

などの実技を、1 週間に 2

回、3 か月間のカリキュラムで養蜂教室が始まりました。もちろん、教室と言っても建物はありません。外に椅子を並べてのいわゆる青空教室です。最初は 15 人くらいでしたが、だんだん人数が増えて、最終的には 25 人の生徒と一緒に養蜂を学びました。子ども達も楽しく真剣に取り組んで



養蜂教室②

くれて、親である養蜂農家さんも協力してくれました。この養蜂教室の企画を通してベルナルドと、心の底から仲良くなれたと思っています。

1 年目は何も出来ませんでした、2 年目で任地変更をしたことで、少しはモザンビークの養蜂の発展に貢献できたかなと個人的には思っています。そして、私の 1 番の成果として自信を持って言えるのは、イニャンバネ州で唯一ベルナルドだけが、養蜂の正職員として採用が決まったことです。養蜂技術の普及と養蜂教室が認められ、農業省の職員の前でベルナルドと一緒に活動報告会をしました。その結果、蜂蜜の採れる時期の関係もあり私は 4 か月の任期延長になりました。残りの 4 か月では、蜂蜜の生産量の調査と養蜂家の数の調査を行いました。2016 年度 4 次隊の同期の中で、一番語学が出来なかったと言われていた私ですが、最終的には同期の中で最後に帰国する隊員となったのです。



集合写真

帰国 5 日前、現地の同僚たちが盛大なお別れ会を開いてくれて、雨が降った次の日だったので蚊にたくさん刺されましたが、最後に最高の夜を過ごさせてもらいました。ベルナルドも「Terra が来てくれて、この国の養蜂のレベルが 10 年進んだ。一緒に仕事が出来て俺の人生は良い方向に変わった。」と言ってくれました。

最高の思い出が出来た。この経験を活かしてキャリアアップをしよう。人生そう甘くはありません。日本に帰国数日後、5 日間高熱が続き、救急車で緊急搬送され、集中治療室で 3 日間過ごし一時は危篤状態まで陥りました。最後のお別れ会で蚊にたくさん刺されて、マラリアが発症してしまったのです。埼玉県では獨協医科大学病院でしか、マラリアの専門医はおらず、まだ日本では認可になっていない治療法で奇跡的に一命を取り留めまし

た。私の記憶も断片的ですが、親戚中が集まり、ベッドに横たわる私を悲しい目で見ている事を今でも思い出します。担当医からは、「ここまで悪くなって生きていた人間は初めて」と言われるくらいでしたが、今まで陸上競技や養蜂作業で鍛えてきた体力があつて良かったと思っています。後遺症として体力の低下や倦怠感が続き、なかなか社会復帰は難しかったため、新規就農者を目標にリハビリも兼ねて埼玉県農業大学校に2年間通うことになります。この時私の年齢は30歳。高卒の生徒もいる中で、おじさん学生でしたが農業技術だけでなく農業経営についても学び、ミツバチが役に立てる複合農業を模索しました。

そこで、養蜂なら果樹との相性が良いだろうという事で、ウメの産地である埼玉県越生町の山口農園の山口由美氏を紹介していただきました。ウメの受粉には、ミツバチが必要不可欠です。ミツバチの受粉があるかないかで、3倍の収量の違いが出ると言われていますが、現在の越生町には養蜂家がないので、他市町村から交配用ミツバチの巣箱を借りている状況です。そこにミツバチと一緒に私が移住する事で地域の活性化にも繋がると考えたのです。また、高齢化に伴う担い手不足を解消するため、私自身が梅農家となることにしました。越生町では、担い手のいなくなったウメの成木林を新規就農者に貸し出しています。在学中から山口家に泊まり込みでウメ栽培の指導をしていただき、2022年4月から、「寺田養蜂園」の屋号で、養蜂とウメで新規就農しました。

新規就農し、自分の経営理念を考えた時、SDGsの考え方を取り入れた農業というものが、今後のトレンドになってくると私は考えます。SDGsとは日本でもかなり浸透してきましたが、2030年までに達成すべき、国際社会共通の持続可能な開発目標のことで、17の目標(ゴール)と169の具体目標(ターゲット)で構成されています。

17の目標の一つに、13番目として「気象変動に具体的な対策を」というものがあります。養蜂と絡めて考えてみましょう。ミツバチが媒介となり、植

物の受粉を促進します。受粉により種子ができ、緑化が進み、二酸化炭素量の削減と酸素量の増加が期待されます。二酸化炭素量の増加が気象変動に影響があると言われているので、養蜂による具体的な対策になると言えるでしょう。目標の2番目の「飢饉をゼロに」や、15番目の「陸の豊かさを守ろう」など、今までやってきた事に、SDGsの概念を企業理念に入れている農業者が増えてきています。

それではSDGsは何のためにやるのでしょうか？ゴールと絡める目標ばかりに目が行きがちで、それに対して意識が希薄であると言えます。アフリカから戻った私は違和感を覚えました。日本ではほとんどの人がそれに触れていませんが、SDGsの基本理念は「誰一人取り残さない」ということなのです。



養蜂家の子どもたち

モザンビークでの養蜂教室の活動を通して、学校には通えているが知識が少なく、自信の無い子ども達とも出会ってきました。せっかくミツバチを飼うお手伝いをしているのに、彼らは農業以外の道も模索して、日々悩んでいます。稼げることをしっかり教え、彼らのような若者たちを養蜂業界から取り残さないようにするのが、私の使命であると考えていました。子どもたちだけでなく、任地の人々を誰一人取り残さないために、「勇気づける事」を続ける事がJICA協力隊で一番意識をしていたことです。もちろん一人も取り残さない事は容易ではありません。しかし、自分の影響力が及ぶ社会を増やしていく事で、持続可能な養蜂に繋がると考えています。赴任時には自分の影響力が及ぶ範囲は小さいものでしたが、帰国前には勇気づけ

る対象が増えていきました。

今後の目標は越生町を拠点とした養蜂場の規模を拡大し、越生町全てのウメの受粉をミツバチと共に担う事です。また、ベルナルドや養蜂教室の教え子達を日本に招待し養蜂場を見学してもらえよう、モザンビークで取り組んできたように、地域を活性化できるような農業経営をしていきたいと思います。

「誰一人取り残さないために。」